CEL設立25周年シンポジウム

人とつながりから 持続可能な社会を実現する

地域資源を活かす〝つながり〟の再デザイン
―持続可能なコミュニティ・デザインへ

弘本 由香里
Written by Yukari Hiromoto
大阪ガス㈱エネルギー・文化研究所 特任研究員

〝つながり〟の再デザインが求められる背景・方向性

グローバル化と経済格差の拡大や文化の均質化、それらと表裏をなして生じやすい社会的排除、あるいは世帯の小規模化や多様化によって進行しがちな孤立化、さらに著しい都市化の進行による地域の記憶の喪失や暮らしと環境の交わりの希薄化。このような、社会が構造的に抱えている課題が、個人と地域を大きく揺さぶっている。個々のアイデンティティ確立の困難さにはじまり、個人と地域を支えてきた〝つながり〟の弱体化が深刻な問題になってきている。ここでいう〝つながり〟とは、生活・地域・社会を支える目に見えない絆・基盤としての社会関係資本、すなわちソーシャル・キャピタルである。

この個人と地域を揺るがす〝つながり〟の弱体化という課題を克服するには、「地域資源の活用」が鍵と考える。ここでいう〝地域資源〟とは、地域の特性を物語る自然、建築・街並み、生業、産物、人・組織、祭事、風習などを指すが、これらの資源を媒介に、人と人、人と地域の時間的・空間的〝つながり〟を重層的に紡ぎ、いのちと暮らしの基盤を再生することを〝つながり〟の再デザインの目的とする。そこで、具体的に大阪・上町台地界隈をフィールドとした実践を行ってきた。

フィールドへ〝つながり〟を媒介する地域資源の集積・価値

実践内容を述べる前に、フィールドとしての上町台地界隈の特性の一端を紹介する。上町台地は、地形的にも歴史的にも大阪の背骨というべき場所である。北に大阪城・難波宮、南に四天王寺など、日本史を象徴する資源が存在している。多くの学校や医療施設も集積し、都心居住の人気も高いエリアである。

近年は、多様な地域資源を再生・活用する動きが顕著だ。たとえば、空堀界隈の長屋再生、玉造界隈の伝統野菜の復興、寺院や神社を舞台にした文化活動やコミュニティ・サポート、新たなまつりの数々も生まれている。また、コリアタウンでの多文化共生の取り組みや、ゲストハウスでの多彩な人的交流なども見られる。そして、大阪ガスの実験集合住宅NEXT21が、まさにこの台地の中心部に立地している（図1）。

こうした地域資源の再生・活用プロジェクトは、「歴史につながる生活実感の共有」「まちに住む文化の発展的な継承」「個人と社会を結ぶ共の場の形成」「風土に根ざす生活文化の

再評価」「多様な文化・価値観の受容と共生」といった価値を生み出している。そこで形成される〝つながり〟が、過去・現在、新・旧、自・他、異・同といった対照関係にあるものの交わりを促進し、地域に潜在する課題の認識や解決への力を育む効果をもたらしている。

図1 上町台地界隈の特徴的な地域資源

NEXT21／U-CoRo〝つながり〟の再デザインの実践へ

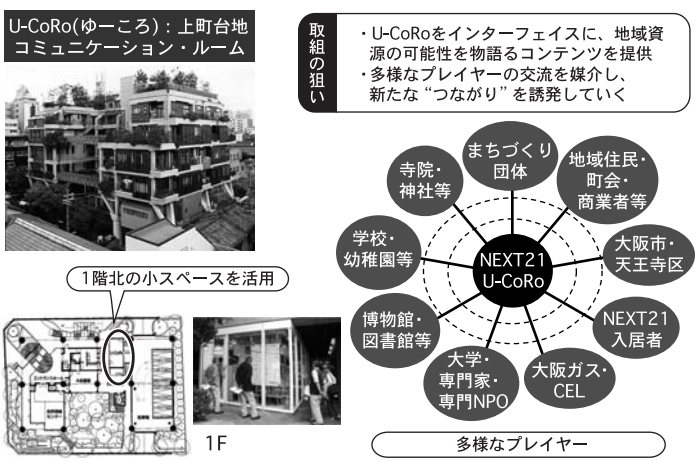
〝つながり〟の形成と効果を引き出していくための実践が、NEXT21／U-CoRoプロジェクトである。上町台地に立地するNEXT21の1階北側に設けた、U-CoRo（ゆーころ＝上町台地コミュニケーション・ルーム）と呼ぶ小スペースを活用した仕掛けだ。取り組みの狙いは、「U-CoRoをインターフェイスに、地域資源の可能性を物語るコンテンツを提供」することによって、「多様なプレイヤーの交流を媒介し、新たな〝つながり〟を誘発していく」ことである（図2）。

取り組みの手法はシンプルだ。4つの基本テーマ、①地域文化の再発見 ②多世代・多文化共生 ③減災文化の創造 ④自然・環境の再生を軸にコンテンツを構成し、ウィンドウ展示と関連するワークショップや交流イベント等のプログラムを展開する。この地域の物語としてのコンテンツへの関わりを、人と人、人と地域の〝つながり〟を育むプロセスとしていく。

同プロジェクトは、2007年春にスタートし、「まつり」「子どもと遊び」「いのちをまもる智恵」「伝統野菜」「コミュニティグリーン」「ものづくり」「水の縁」など、2011年11月9日現在、14の物語としてのコンテンツを地域の方々とともに展開している（次ページ図3）。

たとえば、第1回の「上町台地まつり絵巻」では、新住民がまちの歴史・文化に触れる入

図2 NEXT21/U-CoRoの設置と狙い



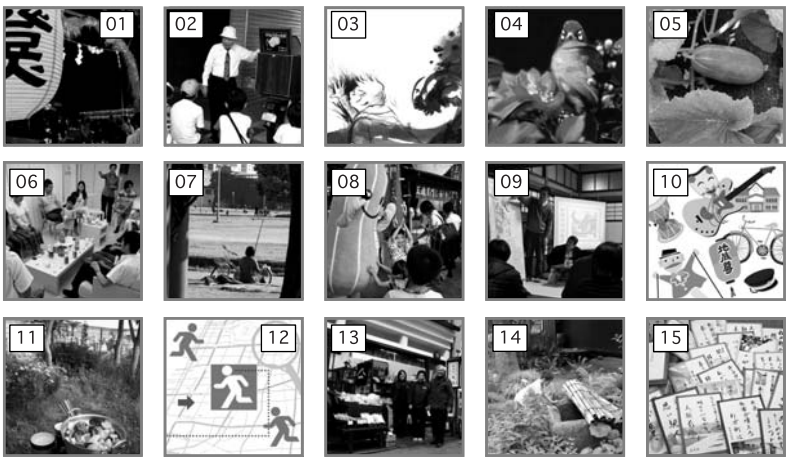
り口として、春夏秋冬のまつりを絵巻のように紹介し、関係者の交流の機会もつくった。第2回の「上町台地 子どもと遊び いま・むかし」では、3世代の居住者の子ども時代の遊び場を調査しマップに表現し、子どもたちとまちの交わりの大切さを考え伝える機会にしている。14回までの展示内容等の詳細は、CELのホームページでアーカイブとして公開しているので、そちらを参照いただきたい（※1）。

始動期の評価から展開期・浸透期の実践へ

実践の始動期1年目に、効果や課題を把握するための調査を行っている。コンテンツの提供に主体的に関わった方々へのヒアリング調査では、属性の異なるプレイヤーの出会いが課題解決の力につながる動きが見られた。一方、提供されるコンテンツを受け止める立場のNEXT21入居者へのアンケート調査では、生活の中での情報の活用が確認できるが、新たなネットワークの形成につなぐには、参加を容易にするコミュニケーションデザインが必要であることも見てとれた。

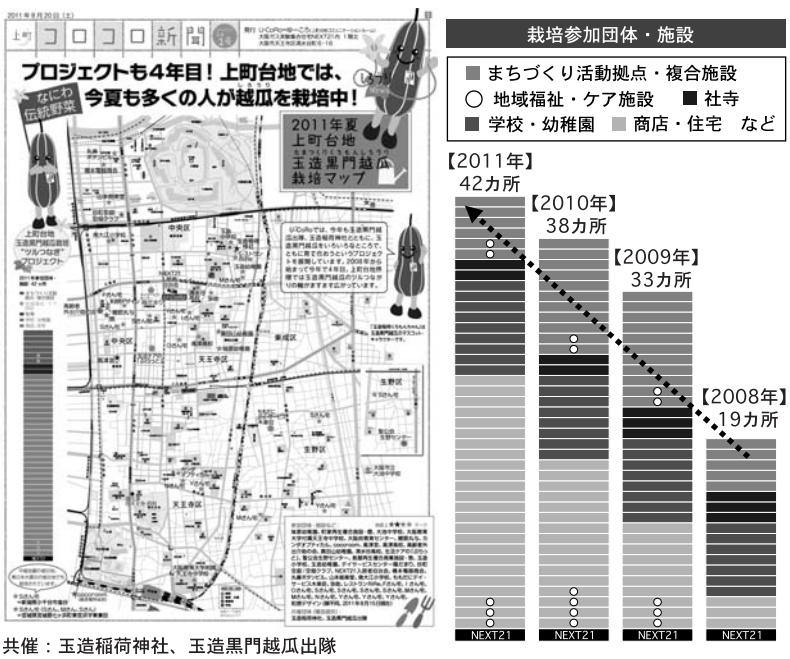
そこで、展開期では、さまざまな動機を喚起し参加の間口を広げるテーマの設定や仕掛けの導入と、取り組みの背景やプロセスを見える化し、気づき・共感を誘発するツールの活用を行っている。

図3 NEXT21/U-CoRoのコンテンツ展開



01 上町台地 まつり絵巻　2007.2.5mon-4.28sat
02 上町台地 子どもと遊び いま・むかし　2007.5.14mon-8.31fri
03「いのちをまもる智恵」を伝える 減災に挑む30の風景と上町台地災害史 2007.9.3mon-12.28fri
04 緑と鳥の回廊、上町台地　2008.1.21mon-5.9fri
05 上町台地と なにわ伝統野菜物語　2008.5.19mon-8.29fri
06 減災ゲームで気づく上町台地の暮らしいろいろ　2008.9.16tue-2009.1.23fri
07 春の日 上町台地で読みたい本　2009.1.26mon-5.22fri
08 上町台地 玉造黒門越瓜栽培“ツルつなぎ”プロジェクト　2009.5.25mon-9.4fri
09“減災キャラバンon上町台地”の道程から　2009.9.7mon-2010.1.29fri
10 まちで育む上町台地の子　2010.2.1mon-5.28fri
11 日常の楽園 上町台地 コミュニティグリーン紀行　2010.6.1tue-9.10fri
12 上町台地 もしも・いつもの“避難所”ウォッチング　2010.9.13mon-2011.1.28fri
13 上町台地 まちなかのプロフェッショナル　2011.2.1Tue-6.30Thu
14 上町台地・水先案内　2011.7.4mon-11.11fri
15 U-CoRo人絵巻～上町台地百人一句　2011.11.14mon-2012.3.30fri

図4 玉造黒門越瓜栽培“ツルつなぎ”プロジェクトの広がり



共催：玉造稲荷神社、玉造黒門越瓜出隊

玉造黒門越瓜 ”ツルつなぎ“プロジェクト 広がる人の輪

参加の幅を広げ共感を育むテーマや仕掛けの一つとして、上町台地の地野菜「玉造黒門越瓜（しろうり）」の復興に取り組まれている玉造稲荷神社とともに、栽培を通して人の輪を広げていくプロジェクトを手がけている。２００８年にはじまり、09年、10年、11年と、学校・幼稚園、まちづくり拠点、ケア施設、社寺、商店、住宅など、話題を共有する栽培ポイントが徐々に増えている（図4）。栽培の様子や収穫祭の様子、自慢の料理での交流の様子など、新聞形式でレポートし、経験を共有できるツールとしている。

”減災文化の創造“をテーマとしたコンテンツの埋め込み

また、いのちに関わる事柄でありながら、日常生活の中で置き去りにされがちな「防災・減災」を、いかに身近なものにしていくかという問題認識から、「減災文化の創造」を重要なコンテンツとして、一連のコンテンツ群の中に埋め込んでいる。

まずは、全国の智恵に学んで、もしものときに備え外の力とつながることを狙いとしたコンテンツ。被災地で培われてきた智恵を集めたストーリーブック『いのちをまもる智恵』（発行：ＮＰＯ法人レスキューストックヤード）を上町台地で紹介し、このツールの制作に携わった災害救援のＮＰＯや専門家を上町台地のまちづくり関係者につないでいる。上町台地の災害リスクにも思いを馳せて、もしものときに備える外部との縁づくりである。

次に、阪神・淡路大震災の経験をもとにつくられた、減災ゲーム「クロスロード」（制作・著作：Team Crossroad〈網代剛、吉川肇子、矢守克也〉）を活用して、地域の内発的な気づきを誘発するコンテンツに取り組んだ。上町台地界隈の５つの特徴的な場所で、ワークショップを実施。もしものとき、さまざまな判断を迫られる体験を通して、当事者としての減災へのスイッチが入る。ゲームが終わると、「災害時にお寺にできることは…」、「長屋のまちを未来に継承するには…」といった声が出てくる。

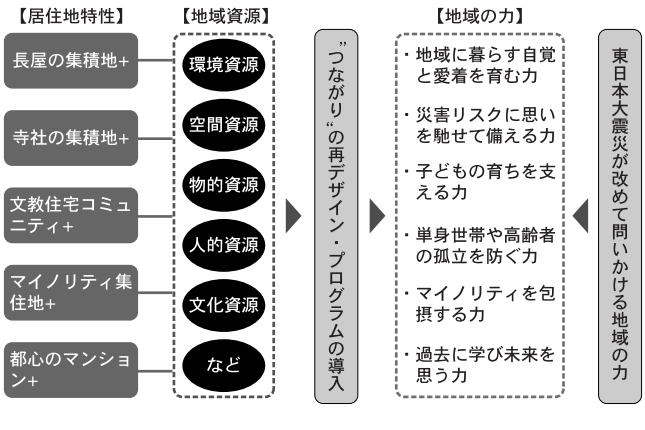
こうした取り組みの波及効果として、地域のまちづくりの担い手と、外部の専門家が協働で減災について考えるイベントなどが、連鎖的に生まれてきた。その様子も、新聞形式でレポートし智恵とネットワークを共有するツールとしている。

さらに、身近な避難所体験を入り口に、地域の防災活動に学んで、智恵とネットワークを共有するための、取材展示にも取り組んだ。住商工一体のまちの緻密な避難想定と連携、ふだんの学校との付き合いの大切さ、都心の避難所が抱える問題、指定避難所以外の拠点の役割など、地域事情に応じた減災まちづくりの第一歩が見えてくる。

”つながり“の再デザインが開く可能性・効用を引き出す回路

ここで改めて、14のコンテンツが物語る可能性を振り返ってみたい。「まつり」からは、時空を越えてつながる生命と文化のダイナミズム。「伝統野菜の栽培」からは、風土とのつながり、経験の共有の実感。「減災ネットワ

図5 地域資源を活かして地域の力を引き出す



ーク」からは、日常の生活文化としての減災文化のありよう。「子どもと遊び」からは、つながりの原点としてのまちや大人との交わり。さらに、つながりのスタイルを媒介する「コミュニティグリーン」。人とまちをつなぐ「手仕事・ものづくり・なりわい」。いのちとなりわいを支える「水の縁」といった、可能性が見えてくる。

一連の実践を通して、〝つながり〟の再デザインの効用を引き出す回路も見えてきた。回路1は、基盤となる自己と風土のつながりを、日常の中で耕していく回路。回路2は、自己と他者のつながり、多様ないのちのつながりを、属性を越えて共有する回路。回路3は、地域と外部のつながり、新たな気づきを促し、エンパワーメントの連鎖を生み出す回路。回路4は、資源と地域のつながり、環境・福祉・文化・減災等一体の、重層的なコミュニティ・デザインへの回路である。1〜4の回路を、地域と暮らしの中に組み込んでいくことによって、いのちと暮らしの基盤の再生に近づいていく。

〝つながり〟の再デザイン・プログラムで育む地域の力

さまざまな居住地特性の中にある、地域資源を見出し、そこに〝つながり〟の再デザインの回路を導入していくことによって、「地域の力」が引き出されていく（前ページ図5）。

「地域に暮らす自覚と愛着を育む力」「災害リスクに思いを馳せて備える力」「子どもの育ちを支える力」「単身世帯や高齢者の孤立を防ぐ力」「マイノリティを包摂する力」「過去に学び未来を思う力」などである。これらの力は、とりもなおさず東日本大震災が改めて問いかける地域の力でもある。

東日本大震災に学ぶ生活意識調査（CEL）から

そこで、東日本大震災によって改めて問われている「減災」と「つながり」について、CELで行った調査（※2）と被災地の状況から考えてみたい。ここでは、コミュニティと防災・減災に関する部分から少しだけ抜粋して紹介する。

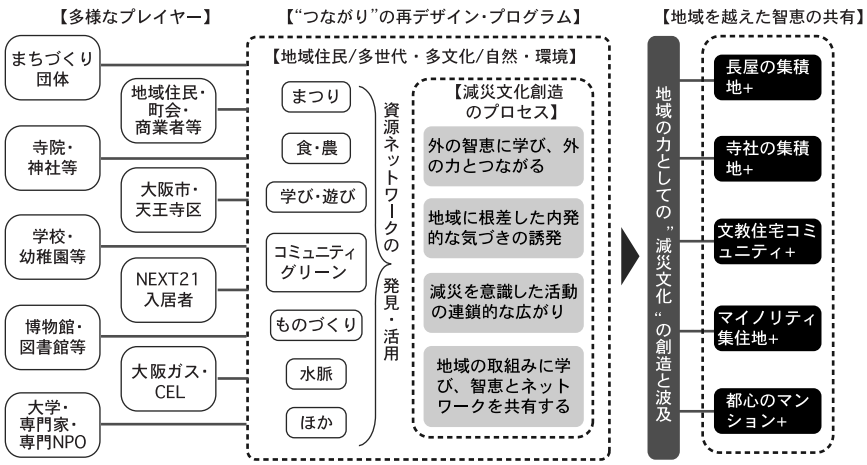
まず、人のつながりについてだが、生活の安全を確保するためにも、今後、「地縁」を大切にしていこうと思う（どちらかといえばそう思うを含む、以下同様）との回答が、60・6％に対して、「血縁」を大切にしていこうと思うが、57・2％。「電縁（ネット縁）」を大切にしていこうと思うが、30％である。

安否確認や被災者の生活支援に、ネット・メディアが活用されたのが、今回の災害の特徴のひとつだが、ネット社会＝安全確保と考えられているわけではなく、むしろ面識社会の重要性が認識されている。

次に、震災をきっかけに、地域や社会の中に、平常時からさまざまなつながりを持っていることが非常時の安心・安全を支える力になることを実感したという回答が、71・8％。天災が不可避であることを考えると、減災がまだまだ不十分だと思うが75・2％。自分の住む地域での地域全体のセキュリティレベルを高める活動、対応拠点づくりの必要性を感じたが67％である。

現代の都市生活の中で、必ずしも優先順位が高いとはいえなかった、地域の人のつなが

図6 〝つながり〟の再デザインと〝減災文化〟創造の構図



りの重要性が見直されている。また、「減災」という考え方の認知が広がり、コミュニティレベルでの防災・減災への投資や実践の必要性が、実感をともなって認識されている様子がうかがえる。

東日本大震災に学ぶ被災地の状況から

一方、被災地の状況から学ぶべき点であるが、U-CoRoプロジェクトで協働している災害救援NPOの方々も、東日本大震災の被災地で活動している。この夏、その活動拠点のいくつかを訪ねてきた。被災地の状況は一様ではないが、〝つながり〟という観点から、3つのポイントに着目したい。

1つ目は「資源を活かす力」である。地域のニーズを感受して、支援に活かせる場や人材など、属性を越えて活用できる資源を見出し、結びつける媒介者の存在が、課題解決の力を引き出し、地域の立ち上がりの鍵となる。

2つ目は「外とつながる力」である。平常時の地域の営みの中で、地域外のNPOや専門家と何らかの接点があることが、生活再建や復興まちづくりを進める力になる。

3つ目は、「智恵を共有する力」である。風土の恵みとリスクの両面を自覚する生活文化が、暮らしの中で智恵として共有されているかどうかが、非常時の対応力や、地域の持続可能性を左右する。

〝つながり〟の再デザイン・プログラムで培う〝減災文化〟

東日本大震災に学び、改めて〝つながり〟の再デザイン・プログラムで培う〝減災文化〟の構図を整理してみた（図6）。

まず、地域の中の多様なプレイヤーと資源の価値を、多彩なコンテンツの展開を通して発見し直す。そして、減災文化の創造に有効な形に再編して活用する。そこから、地域の力としての〝減災文化〟の芽が育まれ、波及し、地域を越えて活かしあえる智恵となって共有されていく。

まとめ 持続可能なコミュニティ・デザインへ

最後に持続可能なコミュニティ・デザインへのメッセージとして、3つのことを述べておきたい。

1つ目は「裏づけられた3つの力」である。東日本大震災の被災地が問いかけてくる3つの力「資源を活かす力」「外とつながる力」「智恵を共有する力」は、地域資源を活かす〝つながり〟の再デザインそのものであるという事実である。

2つ目は「生活のリスクを自覚する」ことである。日常生活の中でリスクに鈍感になるという、現代の生活そのものが抱える大きなリスクを認識し、対応可能な力を育むために、〝つながり〟の再デザインのプログラミングは不可欠であるという自覚である。

3つ目は「将来を左右する智恵の蓄積・共有」である。変化の激しい社会にあって、地域での智恵の蓄積・共有は地域の将来を左右する重大な課題であり、いのちと暮らしの基盤となる資源の価値を見出し、活かし合う〝つながり〟の再デザインの力が問われているという現実である。

この3つの事実と自覚と現実に向き合って、研究活動をさらに深め広げていきたい。

最後に、こうした研究活動は、多くの方々との協働、惜しみない協力、絆と共感に支えられて成り立っている。心から感謝の意を表したい。

（大阪ガス㈱エネルギー・文化研究所 特任研究員）

（※1）U-CoRoプロジェクトの詳細は、ホームページで紹介している。
http://www.osakagas.co.jp/company/efforts/cel/issue/cel/index.html
ウィンドウ展示や関連イベントは、U-CoRoプロジェクト・ワーキングが企画・運営している。2011年11月現在の同ワーキング・コアメンバーは、弘本由香里（大阪ガス㈱エネルギー・文化研究所／上町台地からまちを考える会）、橋本護（Bitrain）、早川厚志（まちづくり工房／上町台地からまちを考える会）。

（※2）大阪ガス㈱エネルギー・文化研究所による「東日本大震災後の生活意識調査」は、調査期間：2011年6月17日～21日、調査方法：インターネット調査（調査会社：㈱インテージ）、調査地域：関東（1都3県）および関西（2府4県）、調査対象：満20歳以上の男女、標本数：500人で実施。